

これまでとこれから

青山英正*

筆者はこれまで、文学を一種の社会的行為として捉え、それを幕末明治期という、社会的にも文化的にも日本史上最も劇的な変容を遂げた時期における社会変容の過程に位置づけることを試みてきた。

文学とは実生活や実社会から切り離されてあるのではない。食事をし、仕事し、余暇を楽しみ、眠る。そうした日常の時間の中に、書物を手にし、読書し、学び、仲間と集い、創作し、出版し、批評するといった文学活動はある。その意味において、文学は社会や政治、経済などを土台として成り立っており、それらに規定されている。その一方で、人々の実生活や実社会もまた、言葉によって規定されており、したがって広義の文学の中にある。日常言語の極北こそが文学だからである。世の中には、文学など無用だとする人々も数多く存在するが、彼らは彼らで、すでに世の中に広く浸透した物語、たとえば科学の進歩こそが社会に幸福をもたらすといった手垢にまみれた物語を生きているにすぎない。

筆者は、いわゆる傑作の文学よりも、むしろそういった手垢にまみれ

た、言い換えれば通俗的な文学にも目を向けて、文学がいかに社会に規定され、また文学がいかに社会を動かしたかといったことを考えようとしてきた。ただし、こうした問題を普遍的な理論や歴史法則として論じるのではなく、一回的で個人的な歴史において論じようというのが筆者の学問的スタンスである。また、歴史というものを一元論や決定論などではなく、むしろ史的多元論の立場で、かつ矛盾と逆説に満ちたものとして捉えようともしてきた。

文学と社会との関係を考えるという学問的スタンスは、いわゆる文学社会学に近いかもしれない。実際、筆者が主に取り上げてきたのは傑出した文学者ではなく、むしろ歴史に埋もれたほとんど無名の文学者たちであり、そうした〈普通の〉人々に光を当てるのは、社会学の得意とするところである。しかし、社会学が社会なるものを大局的に捉えようとするのに対して、筆者はあくまでも個々の人間に即して考えようとしている。自然科学や社会科学の多くは、たとえば被験者A・Bといった具合に固有名詞を消去することで普遍性のある学問として成立している。これに対して、文学や歴史学は、一人一人の人間を数字や記号などに解消されない固有性において理解する。特に文学にはその傾向が強い。筆者は、歴史の大きな流れがあることは認めつつも、所与の歴史的条件の中で個人がどのように思考し、行動したかということに光を当て、そしてそれらに文学がどのように関わったのかを、言葉のレベルから解き明かしたいと考えている。その点において、やはり自らを文学研究の徒であると見なしている。

二〇二〇年に刊行した拙著『幕末明治の社会変容と詩歌』（勉誠出版）は、右のような学問的スタンスにもとづき、十九世紀の日本において、伝統文芸である和歌とその和歌を否定することで成立した新興文芸の新

体詩とが、ともに天皇を頂点とする新たな国家像を支える役割を果たしたことを明らかにしたものであるが、取り上げた多くの人物については、ややナイーブな言い方になるが、それぞれの思いや生きざまを出来るだけ拾い上げるようにしたつもりである。そしてその上で、個々の抱える矛盾や葛藤、各人の間に生ずる誤解や認識の齟齬などが歴史の大きなうねりと響き合う様を描こうとした。

たとえば、内憂外患に頭を悩ませた孝明天皇が、近世を通じて御所で継承されてきた古今伝受をことさらに尊重し、完璧な形で伝受を果たそうとしたがゆえに、かえってその断絶を招いてしまったという歴史的逆説や、その孝明天皇を理想的な君主と信じた幕末の志士たちが、天皇と心情的に一体化すべく和歌を詠むことで自らを歴史上のいわゆる忠臣と重ね合わせ、それを心の支えとして死地に赴いたことなどを紹介した。最終章を歌人と謝野晶子で締めくくったのも、政治に絡め取られながらあたかも利己的遺伝子のように人から人へと受け継がれながら生き延びた和歌と、たんに言葉に操られるだけではなかった人間と、その双方のしたたかな力を、文学的な作品論という形で正面から描き出したかったからである。

さて、今後の研究の見通しであるが、一つには前掲の拙著第二章で触れた近世後期和学、とりわけ京都で書肆を営んだ城戸千楯を始めとする上方の本居宣長門人たちに関する考察を一層深化させたい。特筆すべき業績を残したわけでもないこの千楯という人物にあえて注目するのは、十九世紀の和学が、享和元年（一八〇一）というまさに十九世紀の最初の年に没した宣長の遺産をいかに継承するか、ないしは乗り越えるかという課題を抱えていたことに関して、これまでもっぱら論じられてきた平田篤胤と対立関係にあった千楯に光を当てること、宣長から篤胤へ

というラインとは異なる〈ポスト宣長〉の位相が浮かび上がるのではないかと考えるからである。

従来の研究は、千楯のグループと篤胤のそれとの対立について、千楯一派を歌文に終始したグループと見なし、先鋭的な古道学を推し進めた平田派よりも進取性に乏しかったとして一様に否定的に扱ってきた。こうした見方に対して、筆者は以前、京都の鈴屋門人にも上田百樹という古道学者がいたことを論じ、古道派對歌文派という単純な図式が誤りであると指摘したが、千楯派と平田派との間に潜むそうした類似性も含めて、今後も引き続き両者の精緻な比較検討をおこないたい。そうすることで、上方と江戸という地域性や、身分ないし立場の違いに由来する学問観、学問の方法、学問的組織の形成方法の相違などが浮き彫りになり、結果としてより広い視野から近世後期の和学を捉えることが可能になるはずだ。

すでにその基礎的研究は進めているが、現在に至るまでに、千楯が京都の豪商恵比須屋島田八郎左衛門家を後盾としていたこと、その島田家が本草家や歌人、狂歌師などを生んだ家であり、彼らの学問的風土と人脈の延長線上に、京都の分野横断的な学芸サークル以文会に参加し、上方の狂歌師たちとも交流のあった千楯という存在を位置づけるべきだといったことが少しずつ理解されてきた。すなわち、千楯の学問を理解するためには、京都商人たちの学問のあり方から理解する必要があるということである。そこで、現在以文会の記録である『以文会筆記』三十冊の翻刻を鋭意進めているところである。

また、千楯の書肆としての活動を追ったところ、備中の藤井高尚や若狭の義門といった地方の和学者の研究書を積極的に出版する姿勢が浮かび上がってきた。当時京都の学問や出版は退潮傾向にあったが、そのよ

うな時期に新興書肆として登場した千楯は、興隆しつつある地方の知を生かす戦略を採ったということになるのか。とすると、近世後期の京都が、文化の発信地としてよりもむしろ西日本のハブ、文化的ネットワークの交点として、地方の力を受け止める役割を果たすようになってゆくという歴史的潮流の、一つの表れと見なせるのかもしれない。今後の検討課題としたい。

そして、右の検討課題に取り組む上で大きな後押しとなるのが、三重県津市の石水博物館に膨大に残されている伊勢商人川喜田家ゆかりの歴史資料群である。筆者は、二〇一五年度から二〇一九年度まで科学研究費補助費の助成を受けて同館所蔵の近世書簡約四六〇〇点を画像データ化した。そこには、千楯から書肆の経営を引き継いだ養子千屯から当時の川喜田家当主遠里に宛てた書簡や関連文書が一八〇点近く含まれており、その解読作業を通じて、書肆城戸市右衛門の営業の実態が明らかになってきた。それに加えて、江戸の書肆岡田屋嘉七や三都の学者、茶人、画師、伊勢の愛書家や御師などからの書簡も多く残っており、これらをパズルのように組み合わせることで、伊勢商人川喜田家の蔵書形成過程のみならず、書物流通の上流から下流までを具体的に辿れそうな見通しもついてきた。

このようにして、三都の一つであった京都と、江戸・京・大坂三都の文化と資本の交点にあって近世日本の中でも最も豊かな地方の一つであった伊勢とを両軸に据え、その両方から縦横に交錯する文化的ネットワークのありようを見ることで、これまで個人やせいぜい三都中心に考えられてきた十九世紀日本の知というものを、それを支えた経済的土台も含めた形で広く視界に収められるのではないかというのが、現在の目論見である。

その他の研究課題については列挙するにとどめる。近世和歌から近代短歌への展開を考えるために、幕末から明治にかけて歌人が輩出した家である落合直亮・直澄・直文、また佐々木弘綱・信綱に着目しており、まずは基礎資料の検討から始めたい。また、上田百樹研究で布石を打ったきりになっているが、人間の心の中の〈悪〉なるものが、近世後期から幕末にかけての思想史においてどのように展開してゆくのかという問題も気にかかっている。原則として性善説を採る朱子学から、道徳の埒外にある感情を肯定した賀茂真淵や本居宣長を経て、幕末の〈狂〉に至るまでの過程において、どのように〈悪〉が説明されてゆくのかを辿ってみたい。最後に、近世の人相学に関する研究も、古活字版『人相経』といった稀覯本まで収集した以上、いつか本腰を入れる責任があるろう。あとは時間次第というところである。